

詩人の前に開けてゐる、ひろくとした、光り輝やく地平線であつたのです。

未來の詩人は、多くのことを知るならん

若し詩歌に神祕が必要であるとしても、神祕が消え去ることを恐れる必要はありません。神祕はたゞ後退するばかりです。科學が如何に遠くその征服をおし進めていつても、科學の領域は常に限られてゐるでありませう。その境界の全線には神祕がたゞようてゐます。その境界が遠くなれば遠くなる程神祕は廣がつてゆくであります。

望遠鏡と顯微鏡とが私たちに開いて見せる極大と極小、物理的法則のかくれたる調和、常に更生し常に變異してゆく生命、それ等は詩人たちの試むるに値ひする題材であります。シュライがとりわけ好んで取り扱つたのはかういふ問題ではありません。彼が讚美するのは科學者の精神であります。科學者の忍耐と勇氣とであります。

人間は、眞理を征服するために一生懸命になつてゐるとき、一地方を征服する爲めに一身を賭してゐるときに劣らず偉大であります。疑ひもなく今日の學者は、もはや、一擧にして自然からその祕密をひき出さうとは希んでゐません。彼等は、彼等が一身をさゝげてゐる仕事が大であることは知つてゐますけれども、それと同時に、それが終末のないものであることも知つてゐます。

吾等たゞ一の暗號をかちとらん

一つだつてかまひません、そのやうな暗號が譯山集つて眞理はできあがつてゐるのです。この暗號を得るために、ゼニスのアルゴノオトたちは死に面して一步も退かなかつたのであります。肉はわな／＼と恐ろしさにふるへても、精神がそれを支配し、その理想を追及するために、常に高くへ高くへと肉體をひきずつてゆくのであります。

おゝ主よ、おん身の意志はなじとて吾を苦しむることぞ、

吾は打ち倒る。——高く、——あはれ、——高くと吾おん身に言ひ、

吾は砂を吐いて又も新たに跳躍せんとす。

科學詩は、科學にとつて飾り物に過ぎないかも知れませんが、哲學詩は、眞理を探究してゐる哲學者にとつて、一つの道具となることができます。それは、哲學者が知らんとする實在は、科學者が満足してゐるやうな實在ではないからです。哲學者の實在、哲學者の眞理は、常に生きてをり、常に變化し、その各部分は密接に聯結してゐて、互ひに浸透しあつてゐるやうな觀を呈し、それを引き離さうとすれば、それを破り裂かなければならぬやうになつてゐます。科學者の實在は像に外なりません。それはすべての像と同じく不動であり、死んでゐます。否むしろそれは、石を巧みに並べてあるモザイクです。けれどもたゞ並べてあるだけです。疑ひもなく、

私たちの知り得るものはこの像だけなのです。何故なら、私たちは私たちの理解力に準じてそれをつくつただからです。

けれども、哲學者はそれを思考してしまふと、彼は別のものを要求します。こんな風に、彼が感ずるものを、どうして彼は言ひあらはすでせうか？ 散文の言葉は、科學の言葉のやうなものであつて、一度び定義されると、不變の、はつきりと輪劃のついたものを代表することしかできません。詩歌は音樂と同じやうに、はてしなき夢をよびさます特權をもつてゐます。一つ一つの音譜は私たちの心に何の感動も與へませんけれども、それ等が一つのメロディに結合されると、音樂的詩句の律動が、それ等に生命を與へるやうに、私たちに此の上ない深い感動を與へます。一つの韻文に集められた單語はそれと同じやうな神祕的な力をもつてゐます。一つ一つの單語は、たゞその語に固有の意味しかもつてゐませんけれども、それが一つに集められると、一つ一つの單語と水の表面に石を投げたときに起る波紋のやうに、多くの像が、次から次へと無限に起つて來るやうになります。これ等の波動は、すべて、生ける實在の諸要素と同じやうに、互ひに消融し、互に浸透しあつてゐます。さればこそ、哲學詩はこの實在の甚だ完全なる姿を私たちに與へることがのできるのであります。

けれども、此の詩には、それが深遠なものであること自體から生ずる一の缺點があります。一つ一つの言葉が長い思索を要します。精神は詩人の飛躍にひきづられてそれについてゆかうとしますが、一歩々々につまづいて地上に倒れてしまひます。二度讀みなほすと、苦しい感じは弱まらずけれども、私たちが一篇の詩を暗誦しはじめると、はじめて私たちの愉快はまじ

りけないものになりますのであります。

哲學詩は古くから光輝ある歴史をもつてゐます。私たちは、少しく霧のかゝつたバルメニイドの時代まで溯る必要はありません。リュクレエスの方がより私たちの時代に近いけれども矢張り相當古代の人です。この時代には哲學はまだ幼稚で、自信に満ちてゐました。そして、子供のやうに、ちよつとした光を認めても、それですつかり魅惑されました。リュクレエスは、世界は神の氣紛れに従つてゐるのではなくて、不變の法則、何かは知らないが偉大なる盲目的な調和に支配されてゐるのであることを見ました。この新奇な光景は、彼を驚歎させ、彼の眼に自然の姿を一變せしめました。多くの空想的恐怖からのがれて、彼は自由にはつと息をすることがのできるやうな氣がしました。

不思議なことではありますが、當時の有識者たちにとつては、リュクレエスは人類の恩人であつたのです。その後になつて、キリストが私たちに不滅のものを與へたとき、それは良きたよりであると言はれました。そして更に近代になつて、十八世紀の哲學者たちは解放者として迎へられたのであります。

リュクレエスは師に對する感謝の念に充たされて人々に救ひの言葉を齎さうと欲し、喜び勇んで、傳道のために出發しました。私たちが感動せしめるもの、彼の詩に力あらしめてゐるものはこの熱情であります。今日では、現代の詩を悲劇的ならしめてゐるのは、内部の戦であり、懷疑であります。戦はもはや外に行はれてゐるのではなくて、内に行はれてゐるのであります。シユレイは、どうして彼が「物の本性」の第一卷を翻譯するやうになつたかについて、私たち

に次の如く語りました。「この翻譯は、しつかりした、はつきりした考へをもつた詩人たちに、韻文を思想にしたがへる秘訣をたずねるために、ほんの練習としてやつて見たものである。」して見れば、彼は道具を鍛へようと欲したのです。そしてこの道具は、私たちに「運命 Destins 正義 Justice 幸福 Bonheur 等の詩を與へたのであります。

世界は善であるか或は悪であるか？ それとも樂觀主義者も悲觀主義者も同じ幻想にあざむかれてゐるのであるか？ これが、彼の最初の哲學詩運命に於て課せられてゐる問題であります。シュライ・ブリューダムは、善の精と悪の精とが、それぞれ、自分の計畫に従つて世界をつくらうとし、前者はできるだけ善き世界を後者はできるだけ悪き世界をつくらうとして苦心してゐるさまを私たちに示してゐます。けれども善は悪との對照に於てしか存せず、悪は善との對照に於てしか存しないので、二つの計畫はすつかり同じものになつてしまつたのです。

よくつくられた言語に於ては、幸福といふ言葉と不幸といふ言葉とは原級も、最上級もあつてはならぬのであります。たゞ比較級のみがあるべきです。そして恐らく凡ての形容詞はさうあるべきであります。

この二つの精は、人間をつくり出すときに及んで明らかに誤つたのです。彼等は、人間に別の魂を與へることによつて、即ち、凡ての善に従ふべく、或は凡ての惡に馴れるべくもつとそはそはしない、もつと尊大でない、もつと忘れることのおそい魂を與へることによつて困難を切り抜けることができたのであります。だが恐らく、彼等に忠告を與へるにはもうおそすぎるのであります。

第二の哲學詩に於ては、この思想家は正義を求めてゐます。正義の神によりて創造せられたと言はれてゐるこの自然界に於て、彼は種と種との間の、國家と國家との間の、或は國家内の、市民と市民との無慈悲な争闘のみしか見出しません。地上至るところで、征服者は正義を蔑ろにしてゐます。では他の天體に於てはどうでせうか？ 疑ひもなく、星の世界は遠くから眺められてゐるために得をしてゐます。

かはらぬものは人間の良心のみであります。そして正義の觀念の唯一の避難所は人間の良心のみであります。それは恐らくいつかは勝利を博するでありませう。けれども、人間の來たのはあまりに早すぎたか或はあまりに遅すぎたのです。そのために、人間は永久に流竄されてゐるやうに感ずるのであります。それでも人間をつくつたものは自然であります。自然は一日たりともその無私公平なる道義を忘れたでせうか？ 自然はライオンに食肉獸に有用なる残忍性を與へたやうに、人間には社會的に生活してゆかねばならぬ種の保存に必要な道德的意識を與へたのであります。

此の意味に於て、この良心の渴仰は、自然の神祕なる計畫と一致してゐるのであります。この詩人はかやうな説明で満足し、苦惱から救はれて歡喜の詩をうたつてゐます。おそらくそれはあまりに早まり過ぎたのであります。何故なら、眞の問題、最も苦しい問題にはまだ觸れてゐないからです。どこに正義があるかを見わけることができるでせうか？ 私たちは或る一面に於て不正ならざる正義を考へることができでせうか？

正義のつぎに詩人は幸福を探求します。この幸福こそは、人々がたえず要求してゐるものであ

ります。幸福こそは人々がのぞむことのできないものであります。文明の進歩は人々に幸福を與へることができ得るでせうか？ 人は、人間が働くのは幸福のためであると信じさせようとしてゐますし、かうした幻想は必要ではありませんが、しかしそれは幻想です。人間は幸福ならんがために働くのではなくて、強からんがために働くのです。そして強からんがためには非常に屢々自己の幸福を犠牲にします。かつて人間は、楽しい遊牧生活をすて、つらい土地の勞働につきました。人間はひろくとした土地に於ける長い夢を何の未練もなくすてたと考へられるでせうか？ だが、彼は是非さうしななければならなかつたのです。何故なら豊沃な耕作は大なる軍隊を養ふからです。その後人間は田野の自由な空氣をすて、狹隘な工場に入らねばなりません。それは、力を與へる鋼鐵をつくるには籠がいつたからです。萬一、或る國民が強いて幸福をえらんだならば、もつと拔目のない隣國は、忽ちこの國民を自由に掠奪してしまふであります。

地上に於いてかくもみじめなる人間は、どこか遠くの星の世界に於て幸福をのぞむことができ得るでせうか？ そのためには、人間は魂をかへねばならぬでせう。彼には天使の魂か獸の魂か、必要になるでせう。詩集エ、*Paradise* の中に次の句があります、

別のものとならざれば幸福を享樂し得ざらん

されど別のものとなりて幸福を何にかせん

フアウズチユスとステラとは死後、幸福な星の世界で邂逅しました。この世界には詩人の想像

の及ぶかぎりの調和と美とが積み重ねられてゐました。しからばそれは幸福であつたでせうか？ 否、人間は戰をやめてしまへば生き甲斐なく感ずるので。彼はこの活動もなく、情緒も起らない幸福には倦きてしまふであります。この詩の中に、そのことを最もよく云ひあらはしてゐるやうに思はれる一つの挿話があります。ステラは歌ひはじめましたが、その聲はもはや地上のものではありませんでした。

なげきもなく……

慄ひもなく……

嗚咽もなし……

だが、なげきも、ふるひも、嗚咽もなき音楽とは一體何でせうか！

疑ひもなくこの二人は地上の思ひ出をもたなければ、すぐに倦怠を感じたであります。けれども、この思ひ出そのものが苦しみののです。そこではまだ不幸な人たちが苦しんでゐるのです。敏感な魂は、すぐそばに地獄のあるやうな極樂を考へることはできません、かやうな極樂を喜ぶことのできるやうな人々、正義に恵まれてゐる人たちは、そこへはいる價値がないのです。フアウズチユスとステラとは地上へ歸らうと決心しましたが、彼等が着いた時はもう既に遅すぎました。人類はもはやゐなかつたのです。けれども、この空しき犠牲の美しさは、彼等が如何なる極樂からも期待することのできなかつたものを彼等に與へたのであります。

かやうにして、シュライは、私たちが既に彼の青年時代の日記に見出した、犠牲による幸福の思想を美しき詩にうつしたのであります。

八八九年以來、シュライ・ブリュウドムはもはや詩を發表しませんでした。詩を書くことはやめませんでした。形而上學の問題が彼をなやまし、彼はそれに凡てをさげようとしたので

す。彼は或る青年に向つて次の如く書き送りました。「人智の限られた限界を知つたならば、無智に安住するのが最も容易である。さうすれば、空の星をはずしてとることができぬことを苦しまなくてもよいやうに、最高眞理に達することができないことを苦しまなくてもよい」。彼はこの忠告を與へることはできませんでした。彼自身はそれに従ひませんでした。何故なら、彼は詩人であつたからです。そして詩人こそ正に星をとりはずさうとして苦しむ人たちだからです。

彼は懷疑家ではありませんでしたが、彼の最後の著書の標題は、吾何をか知る？ *Que sais-je?* といふ標題です。吾何をか知る？ 凡ての思想家が最後にはかう言ひますが、彼等の道は如何に千差萬別であることとせう？ モンテニユは、吾何事をも知らずとは敢へて言つてみません。さういへば一の斷定になりますから、吾何をか知ると言ふ方が彼には一層用心ぶかいやうに思はれるのです。シュライが、吾何事をも知らずと言ふことを欲しないのは、あまりに輕率に無力の告白をすることは、彼には殆んど捨鉢のやうに思はれるので、彼の全精神がそれに抗議するからです。

彼の哲學説は何であつたでせうか？ 彼は唯物論者でもなく、さうかといつて精神主義者でも

ないと自分で言つてゐます。彼は、はじめに、外界の存在について同意を求めてゐるから觀念論者ではありません。けれどもまた彼はほんとうの實在論者でもありません。何故なら彼は實在論といふものが妙なものであることを理解してゐたからです。彼はまた實證論者でもありませんでした。彼は平氣で『宇宙の絶對的形而上學がある』と書いてゐます。だがもうこの邊でやめませう。哲學の字彙には、何々論者と綴れる言葉があまりに澤山あるので、この無限に多くの言葉に私は閉口してしまひます。

私たちは、彼が凡ての分類を嫌がつてもあまり驚きません。眞の哲學者の魂は一の戰場であります。それはたゞ一人の君主の席しかない平和な君主國ではありません。この戰場に於ける交戦者は何者でせうか？ 一方は、氣むづかしい、頑固な理性であり、他方は如何なる論據にも服しない心の憧憬であり、深い本能であります。それはカントの言つたやうに、純粹理性と實踐理性とであります。

この戰に於ては、純粹理性は前もつて征服されてゐます。私たちの本能は私たち自身です。ですから、私たちが、多少本能の肩をもつて、本能の本へ秤をかたむけるは自然であります。そこで、純粹理性は、その無慈悲な分析に於て、忽ち矛盾に遭遇します。その敵手も亦矛盾に遭遇するので、この方はそれを意に介しません。ところが、理性の構成に於ては矛盾は致命的です。こゝに於て私たちは、理性が私たちにひらいて見せるやうに思はれる世界の純然たる外觀だけしか見ないやうになり、従つて戰場は、私たちに情操或は幻想を與へるところの憧憬、或は實踐理性の天下となり、それは私たちが宇宙の生命に參與せしめることによつて、私たちに宇宙の何物

かを啓示するのであります。

哲學者たちが互に異るのは、わけても、彼等の實踐理性の解しかたによります。カントにとつては、それは不撓の道徳であります。新教の教理問答のやうな少々乾燥な道徳であります。シュライ・ブリュウドムにとつては、藝術と美とに對する愛が、正義よりも憐れみをむねとする道徳的善と結合してゐるやさしい眞心の混融状態であります。それは彼にとつては現實世界の反映であります。彼は、蒼空の中には、學者がそれによつて蒼空を説明するやうな細かい塵埃以外の別なものがあるのを感じます。そして、そのことは、幻想ではなくて、彼の憧憬、進化を生じ、宇宙をつくるこの恐らく盲目的な力のうちに、彼が認識してゐると信ずることだと彼に希ませたのであります。

しかも、どうしても彼は平和を見出しませんでした。この彼の憧憬の世界は、光り輝いてはゐるが、變化常なき、多様な詩人の世界だつたのです。それはカントの世界のやうに輪郭のくつき入りとした干乾びた世界ではなかつたのです。

私たちの心を最も動かすところの不死の問題については、彼は希望を失つてゐました。そして

青も黒もすべて美はしく愛らし

墓の彼方には

はてしなき黎明あり

眼を閉づともなほ見ゆるなり

と言つた彼は今や「やがて吾考ふることなき時來らん」と書いてゐるのであります。

或る神學者たちの輪廻説は彼を恐怖せしめました。神に人間の魂を與へることは神に責任のある魂を與へることになり、神をとがむるに宇宙にある凡ゆる惡をもつてすることになります。けれども、詩人は輪廻論者に外なりません。何故なら彼には像が必要だからです。こゝに於て詩人と哲學者との間に勝敗のつかぬ戦が行はれます。「神とは吾に理解し得ざるものなり」と彼は叫びましたが、それでも彼は神を求めました。

無限にうちひしがれ

望みなくひれ伏して

無氣味なる沈黙のうちに

解きがたき宇宙をおもふ。

額は重く、胸は裂かれ、

知ること多ければ悲しみいやすざり、

最後の殿堂の階段に、

ひざまづきてなほも泣く。

パスカルが言つたやうに、神を求めることは既に神を見出したことでもあります。シュライの母が、すつかり氣を揉んで、ガストン・パリスに向ひ、「件の書いた書物には神様に逆らふやうなこ

とは何も書いてありませんか、どうぞ言つて下さい』と言つたときに、彼は次のやうに答へましたが、その答へは正しかつたのです。『奥さん、御子息さんの書物には、不信心な言葉や考へは一つもありません。あの詩はみんな、神に背を向けるどころか、たえず益々熱心な益々信仰深い努力をもつて神を求めてゐる詩であることを誓つて申し上げます。』

パスカルは私たちにとつて一つの疑問であります。思想家のうち、此の疑問になやまされなかつた人はほとんどありません。パスカルが彼と同じ苦しみを知つてゐたこの詩人哲學者の心を惹かなかつたら驚くべきことであつたでせう。一八六二年にシュリイは彼の日記に次のやうに書きました。

『パスカルよ、私はあなたを讚美する。あなたは私のものだ。私はあなたの中へ没入してゐます。まるであなたの中で考へてゐるやうに、大いなる悲しみ、深き、深き、夜の如く深き、夜の如く遙かなる微光に満ちた悲しみ。私の先生となつて下さい。私をあなたのものにして下さい。私は無限に苦しんでゐます。私は眞理のまはりにひきつけられてゐるのですが、いつまでも眞理には達しません。』

その後パスカルの名は初期のかず／＼の詩に、幸福の中の詩に、屢々見出されます。ファウスチヌスをはげまし、彼を慰さめに出てくるのも矢張りパスカルです。最後に、彼の脳裡にしばしば現れたパスカルの姿は、シュリイをして、非常に探索的な一書を書かしめてゐます。その書物の中で、彼はパスカルの計畫を再建しようとし、感想録 *Reveries* の順序を補修しようとしてゐます。

パスカルの魂は、彼にとつては心惹かるゝ神祕でありました。何となれば、それは不思議にも彼の魂と似てをり、同時に甚だしく彼の魂と異つてゐたからであります。それは、やはり冷靜なる理性と心情の憧憬との争闘でありました。けれども、この憧憬は、極めて情熱的な、極めて激越な、極めてのつびきなならぬ、そして就中極めて無慈悲なものでありました。パスカルはやさしいよりもより多く熱情的でありました。彼が奔放な慈心に驅られて愛したのは人類ではなくて、専ら、イエス・キリストの聖體の各部即ちキリスト教徒でありました。又彼は、凡ての苦しめるものに對して寛容と憐憫とに満ちた、やさしい心を尻ごみさせるジャンセニスムの狂暴な神をも、平氣でうけ入れました。

シュリイは美的憧憬と道徳的憧憬とを別々に引きはなしませんでした。藝術に於ける審美感は自然に於ける審美感和同じく彼には眞の神性の啓示のやうに見へ、その發現はどんなものでも彼には無關心ではありませんでした。最も繊細なるもの、最もかよわきもの、最も細微なるものが彼には、最も貴重なるものゝやうに見えました。パスカルを壓倒したものの、彼が専らその讚美の念、一種の畏敬の念をもつてゐたものは、それとは無限に反したものでありました。この畏敬の念は彼をやさしく天へ惹きつけるかはりに、彼を慘酷にも虚無へつき返し、超自然的な神寵のみがそこから彼をすくひ出すことができたのであります。それは何といふ類似であり、しかも何といふ對照であります。

長い戦の後、パスカルは一の平和を見出しましたが、シュリイ・ブリュウドムは決して平和を知りませんでした。パスカルが直接にアブラハム、イザーク、ヤコブの神の存在を感知した一六

五四年の夜の事を詩人が私たちに語つたときに、彼は、彼自身がリヨンで、同じやうに明らかにかゞやいてはゐるが、一層逃げ易い光に侵入された夜の事を思ひ出してゐたに相違ありません。そしてこの思ひ出は彼に哀惜の思ひをよびましたのであります。

彼は言ひました。「あゝ、彼の運命は、その苦しみにもかまはずに、彼に劣らず、眞理と正義と愛とに飢ゑ、それ等に飽くのぞみを失へる人々をどんなにひきつけることができたやう。』けれども彼はこの哀惜に身をまかせてしまひはしませんでした。彼は人間はどんなことがあつても『眠つてゐて、信じてゐるのだと夢想することを快しとすること』はできぬといふことを理解してゐました。理性をすてることは彼の眼には墮落であるやうに見えました。そして彼は、永久に自己に休息を知らせないやうにしました。彼は、彼の魂の中で争つてゐる二つの力の一つを犠牲にすることによりて自己を小さくしようとは欲しませんでした。

理性には限界があります。それは相対的なものしか知ることができません。それでも理性は自己の領土に於ては主権者であります。パスカルの信仰は、彼に他の多くの犠牲を要求しました。シュリイはそれに満足しようとは欲しませんでした。獨斷的教義の精細な分析によりて、彼は、これ等の教義は、たゞに私たちの欺かれた理知にとつての始末におへない神祕であるのみならず、それは矛盾してゐるために無意味であることを認識したと信じた。そして彼はパスカルがわざと眼かくしてゐたのでないとすれば、どうしてこの眞理を彼が見逃したかをあやしました。彼が地球の運動の問題や、聖書に書いてあることの眞偽の問題に觸れなかつたのは、彼があまりに多く知ることを怖れたためだつたでせうか？ かゝる見解から、何としても驚くべき判断が生

じました。「パスカルは英雄ではない。」これが、此の著書の眞の結論だつたのでせうか？ 疑ひもなく、否、何故なら、此の書物の全體の統一を損ふことなしに、別の文句を引き出すことができるからです。次の如き最後の叫びにおはつてゐる文句には、同情の跳躍以外に何物も、このつてゐないのであります。「此世に於ては、愛のために我慾を犠牲にして善をなし、彼の世に於ては神そのものとなりて蘇る。何たる報償ぞ、何たる夢想ぞ！」

シュリイ・ブリューダムは單なる素人通人として美術を觀賞したのではありません。彼は好んでモデルをつくりました。彼は、彼の母や友人たちの肖像をあらはした小さいメダルをのこしました。又私たちは彼がイタリヤ及びオランダを旅行したとき、鉛筆若しくはペンで、彼が訪れた美術館の繪の中で彼の心を打つた作品を素描した寫生帖をもつてゐます。そこには、表現のうまみと、若干の技術的精巧とが見出されます。それにひきかへ彼は音楽家ではなかつたといふことです。それでも苦悶 Agonie を書き、幸福の中の忘れることのできない詩句を書いたのは彼であつたのです。

けれども、彼は、彼が感じたものについて反省を加へなかつたことはありませんでした。彼は彼の肖像畫を描いた畫家に、たえずどうしてちよつとした刷毛さばきや、見わけ難い位の線の加減で表情や相貌がひどくかはつてくるのであらうかとたづねました。美に對してかくも敏感であり、かくも理解せんとする欲望の熾烈であつた彼が審美理論をのこしたことはあやしむに足りません。

藝術作品が私たちにひきおこす快感に、彼は二つの要素を區別してゐます。色彩又は音響が純

粹にして且つ調和的に結合されてゐる時に感官に歡喜を生ぜしめることがなかつたならば、眞の美はないでありませう。それ故に、少くもすぐれた感官をもたない人は藝術家ではありません。けれども、藝術はこの美妙なる肉體的快樂につきるのでありません。藝術の眞の目的は表現であります。藝術作品は、何かしら神秘的な共感によりて、藝術家の魂の中の或るものと、私たちの粗雑な眼だけでは見わけることのできないモデルの中の隠された性質即ちその内部にひそむ精髓とを、同時に私たちにあらはして見せます。

表現は或は客観的であり、或は主観的であることができます。實際或るときは表現は、現實に自然に存在するものを再生しようとするし、或るときは、私たちの想像力が人間の欲望をもつて生かしてゐる對象についての感じを起させることだけに限ります。

こゝに於て、一見驚くべき美術の分類が生ずるのであります。何故なら、この分類は、建築と音楽とは、いづれも畫家や彫刻家に課せられるやうなモデルをうつすものでなく、主観的表現しか知らず、私たちに限りなき夢想の自由をのこすものであるから、この二つを接近させます。

私たちの觀念は、習性によりてつくられた美妙な連鎖によりて互にむすびつけられてゐます。これ等の觀念は互に相呼應し、氣紛れに見える外觀の下に不撓の訓練をかくしてゐる一定の順序に従つて繼起します。藝術家は舞踊を起さしめる觀念を揺り動かすことができます。するとまもなく凡ての觀念がそれにつゞき、やがて魂全體が波を起して、その波は凡ゆる方向に交錯します。この動搖はそれと結びついてゐるやうに思はれる美的情緒をよびおこし、人間はあだかも、心臓の鼓動の高鳴りを感じつゝ、自己を超越するやうになります。かやうな情緒は、疑ひもなく、魂が

人生の種々の出來事によつて動かされる時にも生じて來ますけれども、その時には、はげしい欲情によつておほひかくされてゐて認知されません。これに反して藝術作品が私たちによびさますやうな柔かな刺戟に面するときは、かゝる情緒は無比であります。

シュライは、彼自身がをさめた藝術、即ち詩歌を忘れることができませんでした。詩歌についても彼は反省しました。彼は傳統的韻文法を忠實にまもり、その諸規則を理性によりて巧みに正常化しようとし、それに成功しました。彼は有名な若干の新規則の中のある人爲的なもの偽りのものを明らかにしました。

彼はあまりに不羈獨立の詩作者たちに、彼等に一人の先驅者があつたことを想起せしめました。それはシャトオブリアンであつて、彼の書いた文章は調和ある文章であつたから、若し彼が屢々詩をつくつてゐたら、彼等を凌駕してゐたでありませう。

今日では疑ひもなく彼の考へを時代遅れな考へであると思はれてゐる若い詩人たちがあります。一八九五年にガストン・パリスによりて書かれた立派な評傳を彼等に回想してほしいと思ひます。わけても、卷末の部分、パリスが、その當時に於て既にシュライ・ブリュウドムを時代遅れであるとして非難した人々に對して彼の友を辯護した部分をよく靜思してほしいと思ひます。今日彼が時代遅れであることを證明しようとする人たちは、新しい人々であり、彼等は新しい論據によりて彼を非難してゐるのでありますけれども、往時の彼の非謗者たちは、十五年もたゞぬうちにすっかり忘れられてしまつたのであります。

彼の詩は、甚だフランス的香氣の高いものでありましたが、外國でも賞讀され、はじめてノオ

ベル文學賞が與へられたときに、彼は受賞者に選ばれたのでありました。新聞記者たちは視聽をあつめました。賞の價值、恐らくその精神的價值よりもその金銭的價值は公衆の注意をひき、彼の名譽を、彼の詩によつては動かされなかつた底の方の層にまでもしみわたらせました。ヨオロバは弗の崇拜はアメリカの宗教であると信じてゐますが、それはヨオロバの自惚れです。彼がこの賞金を如何に尊く消費したかは周知のことです。思ひもかけずころがりこんだ福の神は彼には不當の所得のやうに、それを少しでも私用することを恥としてでありませう。遂に老年が來ました。苦しみ多かりし若き日に、彼はほとんど老年をまちこがれてゐたのでした。

年こそ來れ、救ひの年の待ち遠しき哉

脈管を流るゝ血潮もさかしくなり

快樂も吾にとつて魅力を失ひ

しづかに年老りし苦痛とともに吾は生きん

吾が生涯の峯に坐して

憐みなき生を眺めばや

山頂にたちて河と路との

うねるを見るときは如くに

その頃彼が希つた願望のうちで一つだけはかなひました。

心ゆくまで温情を味はゝんかな、

彼がこれ程までに希つた老年が彼にとつてどんなものであつたかは諸君の御承知のとほりであります。ひきつゞきて絶えまなき苦しみ、肉體の衰へ、しかもこの衰弱の上に、毅然として彼の理知は曇らず明光を放ち、彼の魂はびくともしませんでした。幸ひにも、用心深い心づくしによりて和らげられたこの苦しみは、彼の精力を打ちひしぐことなく十年間つゞきました。彼は仕事によつて苦しみを忘れようとした。彼が聖トマス・ダカンの『眠り』を熱讀したのはこの頃でありました。この讀書は、彼に次の如き考へを起させました。『何といふ複雑さであらう！あんなに單純な福音書から、どうしてこんなものが生じ得たのであらう！』

又彼はこの苦しみを友情によつて忘れようとした。彼の友人たちのために、彼はもう一度昔の人間にならうとつとめました。彼のやさしい眼の光が、彼の容貌に一瞬の間の若さを與へた時のほかは彼の容貌は年老ひて見えました。けれども彼は、彼を愛した人たちのために強ひて快活に見せかけようとつとめました。彼は苦しんでゐては醜いことであらうと心配して、彼等に醜さを見せまいために、モルヒネを服んで微笑する力を得ようとしたのであります。

けれども私は彼が死を冀ふてゐたと言はうとは欲しません。彼は死を詮らめたのです。彼は自分の希望をもつてゐませんでした。が、平靜に死の虚無に面することはできませんでした。それは、

彼は哲學者ではありませんが、詩人の想像がむらがり起つて来たからです。この虚無は眠りではなくて、單なる夜であつたからです。

けれども遂に死は來ました。そして死とともに救ひが來ました。彼はそれを待つてゐたのです。彼は苦悶なしにそれを眺めることはできませんでした。何故なら、彼の魂は不安にさいなまれてゐたからです。けれども彼はそれをまともに眺めたのであります。

発行所 東京神田區一ツ橋二ノ三

配給元 東京神田區淡路町二ノ九



昭和三十三年六月十五日 印刷
昭和三十一年六月十五日 印刷
昭和二十一年六月十五日 印刷

譯者 平林初之輔

發行者 東京神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波雄二郎

印刷者 長野市岡田町一七六番地 田中重彌

(定価販賣發行)
定價五圓(税共)

岩波書店
會員番號A一〇二〇〇一號

日本出版配給株式會社

小店の發行物購入に際し何らかの條件により定額以上の不當なる要求をせられたる場合には具體的に御内報を願ひます。

讀書子に寄す

岩波茂雄

—岩波文庫發刊に際して—

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。實ては民を愚昧ならしめるために愚藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に任せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の編譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を駭愕して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する爲藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、従來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等諸種の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては厳選最も力を盡し従來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

982
281

年 月 日 319

閱	閱	閱	閱	閱					

閱
濟

閱
六月廿七日

終

